

出雲国風土記の自然と歴史に出会う大地

島根半島・宍道湖中海ジオパーク

Shimane Peninsula and Shinjiko Nakamura Estuary Geopark

島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会
http://www.kunibiki-geopark.jp

ジオパークって何？

ジオパークは、私たちの暮らしている地域の「地質・地形（ジオ）」とそこに生きている「生き物（エコ）」、そしてそれらと人の「生活・歴史・文化・産業（ヒト）」との関わりを学び、楽しむことができる場所です。

人々が、ジオ・エコ・ヒトのつながりを知り、学ぶことで、自分たちが暮らす地域に誇りを感じ、また地球資源の持続的な利用や自然災害の影響軽減、気候変動の影響緩和への意識と理解を高め、持続可能な地域社会をつくるのがジオパークの目的です。

HUMAN【ヒト】 (Culture・History) 生活・歴史・文化・産業

ECO【エコ】 (Ecology) 動物・植物・生態系

GEO【ジオ】 (Geology・Geography) 地質・地形

大地は、そこに住む人間の生活や歴史、文化、産業、深く関わっている。

大地の成り立ちの違いによって、その土地の動植物や生態系に特色があらわれる。

生き物は互いに適応し合っており、支え合っている。

山や川・岩石などをよく見て、その地質や地形について学ぶと、その地域の大地の成り立ちがわかる。

この地帯が、わたしたちの理由は、あるんだね。

その土地の名産物や動物、大地の成り立ちからできているんだね。

「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」について

松江市と出雲市全域を対象エリアとして、2017（平成29）年12月22日に日本ジオパークの認定を受け、活動の推進組織として島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会を設立しています。推進協議会の会長は松江市長が務め、松江市、出雲市、島根大学が協働で事務局を担い、官民挙げた取り組みを推進しています。

「国引き神話と大地の成り立ちがつながる神秘のエリア」として、地質遺産と歴史・文化が織りなすかけがえない感動体験ができることを最大の特徴としています。

日本ジオパークネットワーク（JGN）
https://geopark.jp/

国引きの大地の魅力

大陸からの分離と日本海の形成など、ダイナミックな地殻変動の跡がいっぱい！

人類がまだ登場していない約2000万年前に西南日本が大陸から分離し、やがて日本海や日本列島が形成されるという大きな地殻変動が起こりました。この中で、美しいリアス海岸の島根半島や国内最大の連結汽水湖の宍道湖・中海、豊かな生態系などが形成されたのです。約1300年前の古代人も変化する大地の魅力で、『出雲国風土記』に国引き神話として描きました。

1 大陸の時代から大陸分裂の時代へ

2000万年前

大陸の東端にあった時代

島根半島はユーラシア大陸の東端に位置していました。その後、日本列島が大陸から切り離されていく中で火山や湖、河川が発達しました。

2 日本列島の時代

1400万年前

現在の位置になった時代

日本海の拡大の後、西南日本列島は、ほぼ現在の位置になりました。このとき、島根半島域では海底火山が活発化し、南部丘陵山地は隆起していきました。

3 汽水湖・平野の時代

1万5000年前

中国山地から運ばれた土砂が堆積し、出雲平野や松江平野が発達しました。このため、島根半島が陸続きになるとともに、宍道湖・中海が形成されました。そして、豊かな自然と多様な生態系に恵まれ、独特な歴史・文化が育まれてきました。

国引き神話とは

国引き神話は、全国各地で編纂された風土記の中で、唯一の完本として伝わっている『出雲国風土記』（733年完成）に登場する話です。ヤツカミズオミズノミコトという神様が、海の彼方から陸地を引いてきて島根半島ができ、豊かな耕作地の拡大を祝った神話として伝わります。島根半島が天然の巨大な防壁となり、斐伊川水系の土砂を堰き止め、肥沃な平野や入り江、潟湖が形成されていく自然へのイメージや日本海の遠方の国々との交流が盛んな場所として、土地を引く姿にたとえたと考えられます。

地図もない1300年も前の人々が作った『出雲国風土記』からは、当時の人々の大地をとらえる感覚や文化をつくった思ひが伝わってきます。

『出雲国風土記』（自願神社社本・自願神社所蔵、島根県立古代出雲歴史博物館写真提供）

折絶（おりたえ）

国引き神話で、ヤツカミズオミズノミコトが海の彼方から4つの陸地を引いてきたと語られる島根半島は、その4つの陸地につながる3つの場所を去豆（こつ）、多久（たく）、宇波（うなみ）の「折絶」と呼んでいました。これらの折絶は地質学的にも断層や褶曲のある場所となっており、古代の人々は大地変動の痕跡を読み取る達人と言えそうです。

三瓶山エリア＝断層の跡
宇波の折絶
美保湾サブエリア＝褶曲の跡
多久の折絶
去豆の折絶
出雲平野
宍道湖
中海
美保湾

おすすめジオツアー

小泉八雲

明治時代、英語教師として松江に滞在した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、安政南海地震の大津波のエピソードを「生き神-A Living God」（『仏の煙の落穂』所収）で物語し、その中で津波（Tsunami）という言葉をはじめ西洋世界に紹介しました。彼は、宍道湖の落日、松江城、加賀藩戸、美保関青石畳通り、日御崎海岸など松江・出雲に風土記の時代から残る風景の魅力を、当時、世界的ベストセラーであった著書『知られぬ日本の面影』の中で、詩情豊かに、また幻想的に語りました。これらは島根半島・宍道湖中海ジオパークの代表的なサイトとも重なっており、ジオツアーを通じて、小泉八雲の足跡を辿ることができます。

しじゅうにうら

四十二浦を巡る

島根半島には、42ヶ所の浦々と神社を巡拝する信仰習俗があったことが、「四十二浦の御詠歌」によって伝わっています。その歌は垢離取歌（こりとらうた）とも呼ばれ、各浦の海辺で「みそぎ」をして、海の潮を汲んで神社にお参りする習わしだったようです。今でも四十九日の忌明けに汐汲みをする浦が数多く残っています。最近では島根半島四十二浦巡り再発見研究会によってバスツアーなども開催されています。

ジオパークは魅力的な3つのエリア

当ジオパークは下記のように、山地、平野、潮が調和したそれぞれ特徴のある3つの魅力的なジオヘリテイジから成り立っています。

島根半島ジオヘリテイジ

宍道湖中海低地帯ジオヘリテイジ

宍道湖中海低地帯エリアは主に南側の山間部から運ばれた土砂の堆積によってできた場所で、今からおよそ20万年前に陸上で噴火した大根島もあります。二つの山間部では、近代まで砂鉄を精製して鉄を製造する「たたら製鉄」があり、砂鉄の混じった花崗岩の山々を削り取って川に流す「かんな流し」という砂鉄採取の方法が盛んに行われてきました。このエリアは、その膨大な量の砂が堆積した場所であり、米や園芸作物の生産、しじみなどが盛んです。

南部丘陵山地ジオヘリテイジ

南部丘陵山地エリアには、大陸時代の花崗岩類と大陸分裂、日本海拡大、及びその後の日本列島の形成までの火山岩・堆積岩でできています。日本海に面した90kmの沿岸部に約50の漁村があり、今でも一本釣りや定置網、ワカメや海苔などの漁業が行われています。

島根半島の大きな特徴

宍道湖中海低地帯ジオヘリテイジ

島根半島ジオヘリテイジ

南部丘陵山地ジオヘリテイジ

島根半島の大きな特徴

① 褶曲・唯浦の直立崖

平らだった地層が、横からの大きな圧力のために波打つように曲がったり、あるいはさらに著しく重なるように曲がったものです。特にそれが分かりやすいところは、唯浦の港にある三角形の大きな岩です。これは、押された岩が直立したものの、さらなる圧力に耐えきれずに振り返ってしまったものです。大地の力をまざまざと表す断崖です。

② 断層と侵食：加賀の潜戸

加賀の潜戸には2つの海食洞があり、北側の洞窟は新潜戸や神潜戸と呼ばれています。ここで佐太の大神が誕生した神話があり、その幼少時に弓矢の権古的にしたので穴が空いたとされる島もあります。新潜戸と約700m離れた島は同じ断層上であり、断層ができたことによって脆くなった部分が波に侵食されて穴が空いたので。一方、新潜戸と南にある旧潜戸は別の南北の断層で結ばれており、同様に脆くなった部分が波に侵食されたのです。新潜戸は2つの断層が交わっているため複雑な形をしています。

③ 地層の相違：津津海岸と明島

津津海岸には、波の侵食による波食槽がひろがっています。写真の真ん中には、明島の右側の海岸は干潮時には広く海岸が観察できます。南側になる写真の手前に向けて砂岩と泥岩が相互に地層を成す古湖層と呼ばれる地層が見られます。また、明島は地下からマグマが上昇して、地層を貫いた岩石からできています。

人々の交流

古代の島根半島は、潟湖が発達した地域であったことや大山、三瓶山という海からの目印となる山があったことなどから、大陸からの渡来人も多かったようです。

北前船による交易

島根半島はリアス海岸に入り江が数多くあり、中でも美保関や加賀、宇波は北前船の寄港地として栄えました。また、鷺浦、手箱などの港は風待ち港としての役割を持ちました。北前船によって昆布やニンゲンが北海道から運ばれ、米や塩、鉄、石州瓦など様々な品物が日本海側各地に運ばれていました。

大根島は火山？

周囲12kmの大根島は中央の大塚山を除いて、その地形勾配は1〜3度とても緩やかな平べったい形の島なのでとても火山とは思えません。しかし、大根島は今からおよそ20万年前、現在よりも寒冷な気候で海面が低かった時代に陸上で噴出した玄武岩溶岩よりの火山です。玄武岩溶岩は溶岩の粘性が極めて低いため平らに流れたものです。

① 溶岩トンネル

溶岩トンネルは粘性の低い溶岩が良く流れた跡にトンネルのような穴ができたものです。大根島に生まれた大きな溶岩トンネルの一つ、電深洞にある「神洞」には、溶岩の上に乗った通路をせり上がって、溶岩が上から降りてくる様子を見ることが出来ます。電深洞は天然記念物。もう一つの幽鬼洞は特別天然記念物として国から指定されています。

② 淡水レンズによる湧水

島の南部では海岸に玄武岩溶岩による黒い柱状節理を見ることができます。こうした地表から地下にしみ込んだ地下水は中海の塩分を含んだ汽水と塩分濃度が異なる、地下ではこれを混ぜるはたらきもないことから、塩水の上に淡水が分布する構造をつくるため淡水レンズと呼ばれます。流入の湧水は島根県の名水百選に指定されています。

地形と文化・生態系

島根半島は今から約2700年前までには、平野の一部がつながったと考えられています。その後さらに堆積がすすみ、今の出雲平野や宍道湖、中海の形ができてきたのです。島根半島の山々に冬の厳しい季節風が流れ、人にも生き物にも暮らしやすい場所となったと思われます。

築地松の風景

山陰の穀倉地帯である出雲平野では、広い平野に家々が点在する散居集落の景色が広がります。それらの家は冬の北西の風を避けるために、黒松を刈り込んだ高く反りのある築地松という防風林を持っています。この築地松の剪定を陰手刈り（のうてり）と呼び、専門の職人の手によって出雲平野の美しい風景が作りだされています。

出雲平野を流れる高瀬川

江戸時代始めの1621年に出雲の豪農の家に生まれた大槻七兵衛は、荒木流（出雲市大社町）の砂丘に一大防風林を築き、続いて薄の砂丘を受け斐伊川（ひいかわ）から取水し荒木流に向かう用水路を開削しました。水が漏れないよう川床にむしろを敷き、粘土で固めた川は、幅約6m、全長約8kmの高瀬川として完成しました。今でも流域550haの農地に用水を送っています。また、川は高瀬舟を浮かべた物資の輸送路として昭和になるまで大いに役立っていました。

松江・出雲の南部丘陵山地

出雲平野、宍道湖、中海と続く平地の南側に丘陵山地帯が東西に広がっています。この丘陵地帯は時代の新旧はあるものの主に堆積した砂岩層や泥岩層で凝灰質砂岩として産出する来待石は加工しやすい硬さであることから、日本産の灯籠や神社の狛犬など多様な石製品になっています。また、この丘陵地帯には火山岩が侵食されてきた魅力的な山容を望むことができます。

① 出雲南部 鞍掛山・岩根寺

出雲南部の丘陵山地帯には粘りが強いデイサイト溶岩によってモコモコと立ち上がったような山が数多く見られます。写真の鞍掛山と岩根寺を抱える険しい山は、それこそオクニヌシの峰と髪飾りと伝わり、近くの4つの山と合わせて六神山と呼ばれています。岩根寺はデイサイト溶岩が崩れた場所にあり、岩の内部の様子が観察できます。

② 茶臼山

約1000万年前の火山活動から生まれた玄武岩の標高171mの山です。『出雲国風土記』に登場する神の籠る神聖な山を意味する4つの「かなひ山」の1つで、見る角度により富士山の形や二つ峰を持つ山体が見えます。麓には古代出雲の中心地、出雲国跡があります。

③ 松江南部の産物

松江市の南部には有名な産物が二つあります。一つは全国的にも知られる勾玉（まがたま）で、弥生時代から現代まで温泉地として人気のある玉造の近くの花仙山から取れるメノウを加工して作られていました。メノウは風化した安山岩の中に脈状に形成されました。もう一つは、凝灰質砂岩の来待石です。来待石はメノウが産出する安山岩と同じ大森層と呼ばれる地層中に含まれ、出雲の神社で参拝者を迎える狛犬石像のひとつが来待石製です。